

名越時敏日史

文久三癸亥
八月ヨリ
十二月マテ

〔貼紙〕
名越日史

糺合未済

文久三癸亥八月ヨリ

十二月マテ

第二十六

先度新上橋へ上書箱被差出置候得共、御引取被仰付候、就テハ方今不容易世態ニ付下情上達之儀ハ勿論、

時世之急務被

聞召上度

御趣意ニ候間、以来言上イタシ度存候者ハ是迄之通筋々へ相付、猶又実底ニ心ヲ用ヒ言上可致候事柄ニ依テハ

御直聞ヲモ可被仰付段被

仰出候条、此旨向々へ不洩様早々申渡、郷士以下末々之者へ者支配頭・主人ヨリ可相達候、

亥八月八日

〔島津久敏〕
大藏

御一門方・島津〔久池〕圖書殿并島津又六郎一列、大番頭以

下月次御礼罷出候面々、奥・表・御勝手方諸御役人、

御役人并詰衆諸士へ御用之儀有之候間、明九日四ツ

時被罷出候儀向々へ可致通達事、

一此節上国之王子其外役々并付々之琉球人、来ル十一

日

御目見被仰付候条、四ツ時登

城進上物可差上候、

一三郎様へ御祝儀等之儀ハ

御目見相濟候、引続於敷舞台可謁 御家老候、

右之通琉球館聞役へ申渡、可承向へモ可申渡候、

八月

(喜入久高)
撰津

右之通被仰渡候間、御座構等諸事如何可被申渡旨御
差図ニテ候、以上、

八月八日

入来院恰(公寛)

諸人雇大工日雇駄賃錢等之儀ニ付テハ夫々等級ヲ以
被定置候処、至此比過当之賃錢相請取候段相聞得、
此節兵火ニ付諸人一統困窮之折柄別テ不屈之至候ニ
付、以來被定置候通可相請取旨支配頭又ハ主人等ヨ
リ數可申付候、右ニ付テハ見聞ヲモ掛置候条、乍
此上不相當相請取候者屹ト可及沙汰候、此旨支配
中へ申渡、與掛・表方へモ可致通達候、

八月十一日

撰津

三郎様御儀被遊

御上京候様被為蒙

勅命候処、今般英夷掃攘ニ付テハ不容易御国難ニテ、

夫形

御上京難被遊御時宜合ニ候間、一応島津(久池)圖書殿へ為
御名代上京被仰付置候得共、何分

皇国御大事之御時節、

御直御上京

御奉

命不被為

在候テハ不被為濟御儀ト被思召候、然処松平(慶水)春嶽様・
細川越中守様(弁應)・松平美濃守様(黒田弁應)・有馬中務大輔様等ヨ
リ追々御使者ヲ以御相談被仰進候趣有之、

御国内之儀深

御配慮之御事ニハ候得共、旁機會御到来ニテ輕重

御斟酌之上、来月中旬

御発駕

御上京可被遊

御決定之段被

仰出候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

但、御日限之儀ハ追テ可申渡候、諸御手当向早々

可申渡候、

八月

大藏

御小姓与之儀、是迄何之誰卜御小姓与卜片書相認来候得共、以来諸書付等何番組小与・何番御小姓与卜相認候様被仰付候条、此旨御小姓与番頭へ可申渡候、

八月

(川上久達)
但馬

島津右門

右

御発駕翌日出立、

右者

(久光)
三郎様就

御上京御旗本組可被召列旨被仰付置候二付、右之通

被仰付候条可申渡候、

八月

(小松清庵)
帶刀

右来月二日出立、日州細島ヨリ乗船、兵庫着之賦、

右同二組

右同

(久達)
川上源十郎

(義賢)
市田隼人

文久三年癸亥九月十六日

三郎様 御発駕前 御筆

御口達書之写

口達

今般多人数上

京ニ付テハ不容易時節、銘々其心得ハ有之筈候得共、若年之輩モ有之候間、若猥リニ無益之所ニ致徘徊候歟、又ハ他藩人等へ私ニ集会致談論候テハ別テ不可然事ニ候、万一異変到来之節ハ從命令尽力有之度頼存候条、此旨厚相含支配中江篤卜開論可有之候事、

右来月八日出立、出水・阿久根ヨリ乗船、筑後住吉へ着、夫ヨリ陸地、小倉ヨリ乗船、前条同断、

御旗本一組

物主

(久達)
島津頼母

右

御発駕前日出立、

右同一組

右同

八月

此節亞墨利加人へ御注文相成候大砲挺数

一大砲四挺 石~~カ~~ポンド

五十封度砲ト申人モ御座候得共、五十~~カ~~ハ九寸五分候得ハ、五十~~カ~~ニテ有之間敷哉、

但、口径九寸式分、四十四封度石~~カ~~、

斤目~~カ~~挺ニ付壹万千八百八拾四斤ツ、

此金四千式百七拾八両三朱ト三匁九分三厘七毛、

~~カ~~挺ニ付千六拾九両式歩ト四匁五分替、

一右同六挺 石~~カ~~卅二封度

但、口径八寸三分五厘、

~~カ~~挺ニ付壹万千式百五拾斤ツ、

此金~~カ~~挺ニ付千拾式両式歩ツ、

一右同~~カ~~挺 石~~カ~~卅二封度

但、口径右同断、斤目九千斤、

此金八百拾両、

一右同拾三挺 鉄~~カ~~九十封度

但、口径七寸五分、

斤目~~カ~~挺ニ付六千八百式拾五斤ツ、

此金~~カ~~挺ニ付六百拾四両~~カ~~歩ツ、

一右同拾挺 鉄~~カ~~六十五封度

但、口径六寸七分、六寸五分ナレハ六十封度、

斤目~~カ~~挺ニ付六千八百式拾五斤ツ、

此金~~カ~~挺ニ付六百拾四両~~カ~~歩ツ、

一右同五挺 鉄~~カ~~

但、四拾式封度、五寸八分〇四毛、

斤目~~カ~~挺ニ付六千三百七拾五斤ツ、

此金~~カ~~挺ニ付五百七拾三両三歩ツ、

一右同五拾挺 鉄~~カ~~

但、式拾四封度、四寸八分一厘六毛、

斤目~~カ~~挺ニ付四千五拾斤ツ、

此金~~カ~~挺ニ付式百四拾三両ツ、

メ砲数八拾九挺、

此金メ四万三百九両三歩、

封度ニ石封度アリ、鉄封度アリ、イツレモ右筒之

下ニ書記置申候、田原拜

一空彈実彈五拾五(兩ツ、脱カ)

右大砲都テ亜米利加之鑄鉄製ニテ、ホルトカルノ属地マカオニ有之由、

但、マカオハ唐国^{ハシロン}香港日本里数ニテ拾五里計先之由、

從田原氏之書状之写

乍恐口上

昨日ハ御鳳翅被成下候処、折節他出後ニテ残心不相奉尊謝候、擬御沙汰之書人惡筆ニテ書人奉差上候間、御握掌可被成下候、頓首敬白、

八月十八日

田原拜

六十五丸ヨリ以上ノ筒ハ榴彈ヲ打ヲ主トシ、実丸ハ其次ナリ、

一 鉄夷彈 四十二丸 二十四丸廿一実丸

以上ノ彈ヲ打ヲ主トシ、榴彈ハ其次也、

此御筒相届候上ハ石封度・鉄封度ノ訳合ヲ能々乍恐御見分ケ、葉量之御賦、且実丸・空丸之打葉等細ニ御吟味無之ト台ヲ損シ、且筒之痛ミモ難被計奉存候承候得ハ皆鑄鉄製ト申事ニ御座候間、乍恐御心得ノ

御為メニ奉申上候事、

大砲ノ初テ玉目ヲ究メル時ハ、夷国ニオヒテ肌合見事ノ石ニ「マルメル」ト申石有之、其石ヲ丸メ、其大サ丈ノ差渡ノ大砲ヲ拵へ、夫レヲ石封度ト定メタリ、鉄彈ノ重サノ封度ハ其後ニテ御座候、然シテ六寸七寸余ニ至ル玉目ハ鉄封度ト相定メ有之事ニ御座候、依之砲術家ハ其処ヲ肝要ニ不存候得者、打出申時ニ打葉之賦六ヶ敷可有之、勘考仕候、

八月十八日

田原拜

京都ヨリ申来候書付之写

^(朝彦親王)中川宮様・^(忠愍)近衛前関白様・^(忠房)同大將様・^(齊歌)二条右大臣様被仰合、去ル十七日暁丑之刻比ニ

御参内、会津松平肥後守様一藩此御方御人数御供大小銃押立九門内差堅、是迄通九門之内外八門者有来御堅ヨリ嚴敷警衛被仰出、堺町御門長州様ヨリ御堅ハ早刻被免、跡御所司代淀稻葉様へ被仰付、^(正邦)参内之公家方・正論之御方々迄 御召、暴論与之公家門迄適々御参内相成候御方茂会薩へ御警衛被仰付候ニ付、

御免無之内ハ奉入儀不相叶趣ヲ御断申上、ヒタ／＼ト差堅、夫ヨリ在京之御大名各方被召

朝儀御一掃相成候処、長州堺町御堅、所司代へ交代

不相成追々暴論家鷹司閔白様御屋敷へ群集、尤、兵器ヲ携勢甚嚴敷、既ニ暴発十分ニ相顕候処、此御方

人数大炮四挺押立長州堅メ、人数之場間三尺ヲ放レ

押付、其跡ヨリ大炮ヲ押立候処、其勢ニ恐怖、議奏

三条中納言様・万里小路様・四条様・錦小路様・豊

岡様・東園様・久世様・沢主膳正此御八人ヲ守禦イ

タシ、日暮ヨリ稲葉様へ次渡、大仏へ落行、同所へ

当夜止宿、昨十九日朝同所出立、一番吉川堅物・二

番清末毛利様、押長州惣人数中央ニアヤシキ駕籠罷

通候由有之、決テ右之御方ニ歎トハンジ申候、昨晚

中国筋牧方西向辺郡山・芥川ト申所へ一宿之賦ト

キカレ申候、

一十八日昼比ヨリ在京之大名衆并各藩引モ不切九門内

へ罷通御守衛、其勢如雲霧御門内へ充滿シ天地モ人

ナラサルハナシ、

一十九日朝、朝議再ヒ相動候、正説相聞得、会薩之存

亡突然ト相顕レ、頭ヨリ決心仕居候儀ニ候得共、逆

モ守返シ候勢ヒニ無之模様ニ御座候処、左大将様御

帰殿ニ相成候御様子相窺候得者、満面ニ笑ミヲ御含

被遊至極上都合、偏ニ会薩尽力故終ニ暴家退散、朝

議再本ニ帰ル儀、偏ニ其身共精心故ト殊之外御感心

ニテ候事、

右京都御留守居方勤之向ヨリ申来候書付ニテ、文久

三年亥九月十九日写也、

長州宰相

同少将

去ル十八日、毛利讃岐守・吉川堅物以下家来共不束

之取計有之、如何被 思召候間、宰相父子へ取調被

仰付候、依之暫九門内藩中之輩往来可為無用

御沙汰候、且過日

行幸御治定ニ付父子之内上京候哉之由、

行幸御延引事故上京之儀可相見合、追テ御沙汰可有

之事、

一去ル十八日、益田兵衛介ヨリ

勅使へ書付返却之事、

一留守居并添役一兩人モ滞京、其余無御用候間、帰国可有之事、

右之通御達相成候事、

亥八月卅日

昨廿六日曉七ツ時比五条表致屯居候浪士共凡千計押掛、貝・太鼓足並ニテ当城下土佐町西之方入口三四町前迄押掛候間手配仕、西口ヨリ壹町余り人数押出、向ヨリ大砲并小筒打掛ケ候ニ付、無余儀及戰爭候処左之通、

一雜兵首七ツ

一同生捕之兵凡五十人

一大筒六挺

但、玉目六封度ヨリ拾五六封度迄、

一小筒三十六挺

但、玉目凡三四匁、

一陣太鼓卷ツ

一鐘九筋

一刃二十五本

一弓二張

一脇差三十五本

一兜卷ツ

一具足卷領

一陣笠五十六

一玉藥算筒二荷

一高張提灯二本

一同箱

一法皮三枚

右之通ニ御座候、味方ニハ鉄炮薄手二人、死人一人モ無御座候、此段不取敢先御届申上候、

亥八月廿七日

植村駿河守使者
村田丈四郎

右之通御届相成候事、

千八百六拾三年第六月廿四日

横浜ニオヒテ

外国軍務執政小笠原圖書頭台下ニ呈ス、
(事務カ)
(長行)

日本在留不列顛女王殿下ノシヤルジダフェールスナ
(代理公使)

ル余之同僚ト齊シク台下大君殿下之命ニテ余二名当
テシ送り給ヘル告書ヲ落手シ、実ニ驚愕セリ、

此細故ヲ載セサル拙キ報告ハ姑ラク置ヒテ論セス、

此国之大君ト御門開キタル港々ヲ鎖チ、条約各国ノ

臣民ヲ故港々ヨリ卻クルタメ台下ヨリ斯ク報告シ給

ヒタル、皇帝大君ノ所置ニ拠レハ日本ニ困難ノ来ル

コト当然タリ、然ルヲ之ヲ全ク知ラサルハナンソヤ、

是レ余ニヲヒテ信シカタキナリ、

不列顛女王殿下ノ名代タル余、第一左件ニ注目ス、

右不列顛此国トノ条約ヲ正シク守リ猶拈メ、加之是

迄ヨリ此条約ヲ自由ニシ、永久動サル様申立ル事疑

ヒナク、君ハ嚴ニシテ日本ヨリ抗拒シカタキノ手管

ナリ、之ヲ柔々調ヘン事ハ、日本之大危難ニ至ルマ

テ皇帝或ハ大君又ハ皇帝大君共ニ秘スル所ノ理アリ

テ最信スヘキ手段ヲ逐一急ニ説明セラレナハ此国ノ

長臣猶其權ヲ存スヘシ、是以テ余此国ノ長官江懇口

ニ左件ヲ忠告スルハ余カ職務タリ、台下ノ告書ニ拠

リ不列顛女王殿下ノ政府熟考ノ上事ヲ決セハ、今秘
シ給ヘル諸種万ノ所置ヲ捕行フトモ其事仕成サルハ

シ、然リトイヘトモ余又次条ヲ台下ニ告知セサルヲ
得ス、今台下ヨリ申聞給ヒタル拙キ告書ハ、文明不

文明国ノ歴史ニモ偽ナキ旨ヲ大君殿下ニ奏シ給フハ

シ、大君殿下カナラス是ヲ御門ニ奏門シ給ヘル事疑

ヒナカルヘシ、此事ハ実ニ条約諸国ニ対シ日本ヨリ

軍期ヲ告スル也、今速ニ鎖港論ヲ止メサレハ日本国

中ヲ速ニ嚴シキ罪ヲ以テ罰セスンハ非ラス、

右者嚴刻ノ告書也、

不列顛女王殿下ノシヤルジタフエイルスシントジョ

ンニール手記、

エルユーステン訳

薩州

家来

何茂精々尽力之段大儀 思召候、以後尚諸藩互ニ申

合、急鎮静之道尽力可有之事、

但、諸藩詰切ニテハ疲労候間、申談交代御警衛可

仕候也、

右、昨日薩藩尽力相勤候間、今日昼時分伝奏來被仰
渡、誠ニ以難有仕合御同前奉存候、不取敢陽明殿ニ

オヒテ 懸御目候、以上、

文久三年亥八月十九日

右京都ヨリ大坂へ申来ル、

年式拾六歳

一 錦小路大和権弁頼徳(介カ)

同三拾九歳

一 万里小路権右中弁博房

右二方ハ正義之由候得共、参内掛被取囲無是非由、

年四拾三歳

一 東園右中将基朝臣(敬祝カ)

同三拾五歳

一 四条太夫隆壽

年三拾歳

一 東久世左少将通弁朝臣(禱カ)

一 豊岡大藏卿随資卿

右之方々モ万里小路同断、

年二十八歳

一 沢主水正宣嘉

同二十六歳

一 三条右少将実美朝臣

右二方出奔、

右者左大将公ヨリ高崎左太郎(正胤)へ被下候御書付之写、

追啓、不容易形勢国家一大事之御場合、不堪苦心可

尽丹精了簡二候、其許共為国家深厚申合、同藩一同

必死尽力、無油断大功顕候様深依頼存候事、

別紙

為今度攘夷 御祈願、大和国行奉(幸カ)

神武帝山陵・春日社等 御拜、暫

御逗留、御親征軍議被為在、其上神宮行奉之事、

口上覚

別紙之通被 仰出候、仍テ為御心得可申入旨被申付

如此御座候、以上、

八月十三日

松平加賀守様

(毛利敬親)
松平大膳太夫様

御名様

右本之儘ウツシ置、于時文久三年亥九月五日、

多羅尾ヨリ差出候書付写

瀧川播摩守^(具知)

当月十七日夕和州五条鈴木源内陣屋許へ凡人数百五十人程銘々甲冑ヲ着、右之内主将ト思敷者騎馬ニテ押寄、右陣屋門前へ赤地ニ菊之紋付候旗ヲ押立、大砲ヲ打込乱入イタシ、源内其外手付手代之内五六人討取候由ニテ、同夜同所桜井寺へ引取、右首級ヲ御仕置場へ掛ケ置、尚又人足ヲ多人数召連罷越、御用書物為持退候上右陣屋同夜四ツ時比ヨリ致放火、尤、依 勅命当年ヨリ御年貢半減ニイタシ、京都直納ニ申付候旨郡中之者共へ申渡候由ニテ、風聞迄之儀ニハ御座候得共、追々御代官陣屋へ押寄候由ニテ相聞得申候、此上拙者屋敷許へ押寄候節ハイカ、取計候様可仕哉、右之趣江戸表へ可申上処、遠隔差向候儀ニモ御座候間、取計向急速御差函御座候様仕度、及乱妨候節ハ少人数之儀ニモ有之行届兼候処、藤堂和^(高懸)泉守伊州上野城之儀ハ行程三里ニテ最寄之儀ニモ御座候間、明和之度徒党強^(訴力)祈等之節最寄領主へ人数差出方掛合之儀、江戸表御達之趣ヲ以和泉守方へ早速

及掛合候儀ニハ御座候得共、御時節柄之儀ニ付尚同人へ人数差出方御達被下候様仕度奉存候、依之此段申上候、以上、

亥八月

多羅尾民部

注

本書ハ八月廿四日会藩秋月^(龍水)梯次郎・大野英馬方ヨリ借受書写モノナリ、多羅尾民部ハ江州信楽之代官ニテ代々土着之人也、先祖ハ 近衛様御血統之由、瀧川播磨守ハ京都西町奉行也、此一挙之根元ハ長州三条等申談近々南都へ行幸ナシ奉リ、夫ヨリ京都ヲ一円焼払、主上ヲ始公卿方ヲ決心セシメ奉リ、大和河内之辺ヲ略シ、夫ヨリ伊勢ノ神廟ニ御参詣ト号シ諸暴士ヲカタラヒ、関東ヲ討ヘキ為ニ先中山侍^(忠光)徒^(只今)ハ浪人ニテ毛利秀齋ト号スヲ大将トシテ人数ヲ出シ、右之乱妨ニ及ヒタル也、今日伝奏野々宮様ヨリ御用ニテ乾御門御堅メ被仰出候、長州人ト見受候ハ、差押候様被仰渡候、
文久三九月廿一日写 外二三通アリ

大目付へ

覚

自国海岸其外御台場持場所之御警衛、兼テ被仰付置候者ハ是迄之通相心得、今度相達候海岸并口々御警衛之儀ハ、惣テ御取締筋厳重相心得候者勿論ニ候得共、持場無之面々ハ屋敷近傍之御守衛相心得、差回次第人数差出候様可被致候、

右之趣万石以上以下之面々へ不洩様可被達事、

八月

大目付

今度上方筋不容易事変有之、人心動揺之折柄、右殘党ハ勿論其心得違之モノ有之、此上何様之事変ヲ企可申モ難計候間、万一之節銘々領分之固ハ勿論、他領ニモ申合相互応援致シ、且又最寄御料所其外寺社領給所カ社小給等警衛向手薄之場所ハ差回ヲ不待、時宜次第出務致シ、取鎮方手拔無之様兼テ心掛置候様可被致候、

右之趣中国九州ニ領分有之万石以上之面々へ可被

相触候、

八月

大目付へ

中山大納言嫡子之由、浪士相交六拾人計具足着用、(忠鹿)拔刀・鐘・長刀ヲ携、河州狭山北条相模守陣屋其外(氏恭)ニテ勅命卜偽、武器馬具等借受候由相聞候間、於領主ニモ厳重致手配、右様乱妨之者見掛次第早速召捕、月番之老中江可被申聞候、時宜ニ寄候ハ、切捨ニ致シ候共不苦候、

右之趣万石以上之面々へ不洩様可被相触候、

八月

別紙三通之通從公義被仰渡候条、此旨組中・支配中・諸郷へ不洩様可被申渡者也、

亥九月廿七日

御軍役方
御家老座印

第二十七

九月被命付候、

五条境町東寺町迄
(堺九)

雲州

広小路今出川迄

土州

今出川口

久留米

三条橋

薩州

八条殿町角

備前岡山

上長者町丸太町迄

武州忍

堀川松原

讚州丸亀

堀川樫木町

備後福山

堀川寺之内

勢州津若殿

松平出羽守
(定安)

松平土佐守
(山内豊範)

有馬中務大輔
(慶頼)

松平修理大夫
(島津忠義)

松平備前守
(池田茂政)

松平下総守
(忠誠)

京極佐渡守
(朗徳)

阿部主計頭
(正方)

藤堂大学頭
(高潔)

下立売千本

備中新見

三条烏丸

紀州

三条堀川

加州

寺町丸太町広小路迄

阿州若殿

鞍馬口

仙台

今出川八条殿町迄

作州津山

五条町

勢州水口

東洞院東へ入境町迄

羽州米沢

堀川中立売

筑前黒田

新町頭

関備前守
(長克)

紀伊中納言殿
(徳川茂承)

加賀中納言殿
(前田斉泰)

松平淡路守
(蜂須賀茂昭)

松平陸奥守
(伊達慶邦)

松平三河守
(慶倫)

加藤越中守
(明軌)

上杉弾正大弼
(斉憲)

松平美濃守
(黒田斉博)

細川家臣

長岡内膳(忠美)

千本四ツ塚

芸州

松平為五郎(浅野長熊)

丸太町口

大洲

加藤出羽守(泰社)

室町今出川上長者町迄

尾州

尾張前中納言殿(慶忠)

丸太町室町東洞院

因州

松平相模守(池田慶徳)

御触之写

元中山侍従(忠光)去五月出奔、官位共返上、祖父以下義絶、

当時庶人之身分候処、和州五条一揆中山中将或中山

侍従卜名乗、無謀之所業有之候得共、勅諭之旨相

唱候故、斟酌致候モノモ有之哉二相聞得、当時称官

名候者全偽名、且不憚 朝権唱 勅諭之段国家之乱

賊ニテ、 朝庭ヨリ被

仰付候者ニテ者一切無之候間、打取鎮静可有之、討

手之面々(江脱力)不洩様可相達事、

右御書付松平阿波守殿相渡候二付、此旨洛中洛外早々可相触者也、

九月

三条前中納言(三条西中納言カ、季知)

三条中納言(実美)

中条侍従(四条侍従カ、隆勝)

錦小路右馬頭(頼忠)

東久世少将(通勝)

壬生修理大夫(修理権大夫カ、基修)

沢主水正(直惠)

右七人去十八日同伴及他国之段、不憚

朝威甚如何二被

思召被止官仕候、和州五条一揆之中山之如、何方へ

手寄偽名ヲ唱、諸人ヲ恐惑致候儀難計候、何方へ罷

越偽名ヲ唱候トモ、聊無斟酌取可有之 御沙汰候事、打敷

但、若乱暴ケ間敷有之候ハ、臨機之所置召捕可有

之候、

右御書付松平肥後守殿御渡二付、洛中洛外へ不洩様(昏休)

早々可相触モノ也、

右京都御触之写

広幡殿（忠礼）

徳大寺殿（実則）

長谷殿（信應）

依 御願議奏御役御免、御自分御遠慮、他人御面会

被止候事、

正親町大納言殿（実徳）

柳原中納言殿（光彦）

広橋右門督殿（右衛門督力、胤保）

議奏被仰出候事、

豊岡殿（隨登）

東園殿（基敏）

滋野井殿（实在）

橋本少将殿（実應）

万里小路殿（徳房）

烏丸侍従殿（光徳）

右御差控被仰出候事、

三条前中納言殿

三条中納言殿

東久世少将殿

壬生修理権太夫殿

四条侍従殿

錦小路右馬頭殿

沢主水正殿

右之御方々去十八日、御不法進退依有之被止官位候

事、

沢三位殿

御自分被止官位候二付御伺之通差控、

三条少将殿

四条太夫殿

沢太夫殿

御父被止官位候二付御伺之通御差控候事、

以上、

御所向八右之通御座候、

第二十八

文久三年壬亥十月七日

御筆仰出

家老中江

昨日不時致勢揃候処、速ニ相揃其上調練之次第モ混

雜無之、畢竟軍役方并物主等之職掌者勿論、一同平

日之嗜別テ満足之事候、

三郎様御留主中ニモ候得者於我等モ昼夜及心痛、方

今之世態尚亦銘々尽職掌、一同文武相励候様有之度

事、

亥十月五日

於薩州鹿兒島接戦之新聞

文久三年癸亥七月九日

西洋千八百六拾三年第八月廿二日神奈川版

一ブリタニヤ^{エケ}飛檄船^船ユルモレント^号、六月二十

六日^{日本五月}付本国ヨリ之檄書ヲ齎シ、本月十三日

日本六月上海ヨリ当港江航海セシニ、洋中ニテ同月

二十九日^{日本七月}鹿兒島表ヲ退港シタル軍艦ト接遇シ

其詳説ヲ得テ諸人へ聞知ニ及ナリ、

一接戦ヲナシタル^(アーガス)アルキユス^船号^(ハヴォック)上ノ両艘モ

今朝当港へ入津シ、猶將船ノ入港ヲ待テ勝敗ノ始終

ヲ了解セント欲セシニ、評説之事實頗ル信スルニ足

レリ、故茲ニ記載ス、

図面之中海防砲台之結構^(敷設カ)左之如シ、

第一砲台

三十二ホント大砲

白砲

第二砲台トノ間ニ野戦砲八挺ヲ備、

第二同

三十二ホント砲

白砲

第三同

大砲

白砲

第四同

第五同

口径^(インチカ)八インスチ砲

三十二ホント同

野戦砲

三挺

第十二同

第六同

三十二ホント同

拾五挺

十八ホント大砲

三挺

第七同

口径十インチ砲

二挺百五十ホント

三十二ホント同

五挺

野戦砲

二挺

第八同

口径十八インチ砲

一丁

三十二ホント同

五丁

拾八ホント同

壹丁

野戦砲

壹丁

第九同

拾八ホント砲

四挺

第十同

右同

三挺

第十一同

口径八インチ同

二挺

三十二ホント同

四挺

三十二ホント同

拾五挺

一我軍艦之一隊ハ將船（ユリアラス）ユライリユス（クーパー）船提督（クルーブル）アル名

乗船（パール）三拾五門備・ピイルル（アーガス）二拾壹門備・アルキユス

同六門備・パールシユース（ゴケット）拾七門備・マリウイット（ハスホース）同

四門備・レースホールス（ハスホース）同四門備・ウキツク（ハスホース）同二門

備、此一隊第八月六日（日本六月二十二日）当港ヲ開帆シ、土曜

日ナル十一日（同廿七日）午後鹿兒島港へ乗入タリ、此港ハ

周リ魏々トシテ恰モ画シ如キ絶景之地ニテ、要害モ

又堅固ナリ、我軍艦隊ハ鹿兒島市街ヨリ距離ヲ隔テ

錨（イカリ）ヲ投シ遥ニ眺望スルニ、其市街広闊ニシテ製作所

倉庫等夥シク、十八万ノ人民住居ストイヘリ、（亥六月二十）

日ニハ我全隊市街ノ真向ニ進ンテ碇泊セリ、図面

ノ中第一之碇泊場也、水底ニ拾尋ニシテ砲台ヲ隔ル

事凡ソ千二百ヤールト（百ヤールトハ日本五十間、六百間、丁ニシテ拾町）、第一砲

台ヨリ第二砲台迄ハ其距離二里（日本ノ二十、（薩英戦時）朝六字

亦六薩州の高士官数人將船ニ入来し即今△

君公ニハ鹿兒島ヨリ二十里離タル霧島へ在ス旨ヲ告

知セリ、味方ヨリ希望ノ事件ヲ記載セシ書翰ヲ此士

官ヨリ付与シ、二十四時^{日本十時}内ニ其報答ヲ翌十三

日^{日本廿七日}午後士官返翰ヲ持參セシニ、引続キ之使者

来リテ其返翰中ニ添削スヘキ所アレハ、今一応清書

之上時刻ヲ移サス返答ニ及ヘシト士官一同退去セリ、

同夜九字四ツ半比迄返翰到来セス、稍時ヲ経テ事件

ニ關係セザル事ノミヲ書載セシ返翰ヲ入掌セリ、次

日十四日^{同七月朔日}九字比此返翰受納之請書ヲ得ンカ為

士官兩人船中へ来リテ告述スルハ、外国人ヲ切害セ

シ一條ハ薩州ニテ議論ニ及バス、大君殿下ノ政府ニ

於テ談決スベキ旨京都ニテ一橋公并 両閣老ヨリ嚴

達アリシ旨、此事件ニ付テハ、江府ヨリ告達ナキカ

故、既ニ談判治定候事ト信用セシニ、何故此度軍艦

薩州へ出張セシヤ了解セス、剩ブリタニヤノ希望ニ

付日本国法ニ基ケハ薩摩一己ニテ談決シ可否ノ沙汰

ニ及ヒカタシト説明シ、唯偽説ヲ設ケ事ヲ遁ントノ

所置ナルカ故、平穩ノ計策ニ靡セラレ、今ハコロネ

ル官^名ニイル人^名其職務ヲ投棄シ万事提督ニテ掌握セリ、

同日午後軍艦ノ全隊ハ敵対ノ色ヲ顯シ、砲台^面面ノ

中「第二砲台也」ヨリ之目的ヲ避ケ容海之央ヨリ備

タリ、兩岸トノ距離ハ千七百ヤルト也、十五日^{七月二日}

朝將船ユライリユス船及ヒペルシユス船未タ砲台ヲ

避ストイヘトモ、^(パール)ピイルル船・コクウイツト船・

アルキユス船・ウヲツク船・^(ハヴォック)レースホース

艘海隅ニ進ミ、碇船シタル三艘ノ蒸氣船ヲ質トシテ

引出セリ、此蒸氣船ハ即^(インケランド)エンケランド^{天祐}、是ハ千

八百六拾老年^{文久中}洋即拾貳万枚、シルシヨルチギ

り^{青鷹} 餉洋銀四万枚、コンテスト^{白鳳} 餉洋銀八万五

千枚ニテ昨年五月^{我三}薩州へ買入シ船々也、此碇

泊場ハ^(ウイラモット)面ニ記セストイヘトモ、ウラルモツト^名人水

葬所之後手ニ藏伏セシメタリ、此朝瀟々トシテ海水

山^(谷カ)則溢レ、颶風颯然トシテ波浪漲シニ、十字比^{四ツ}

味方ノ船々辛シテ日本蒸氣船ヲ引テ退ケリ、十二字

味方ノ水主午食ヲ吃セシ時、將船^(ユリアラス)コライリユウス船

へ向シ陸手砲台及ヒペルシユース船へ向ヒシ島手砲

台ヨリ砲声聞ヘシ故、我全隊毛錨ヲ巻キ一線ニ列リ

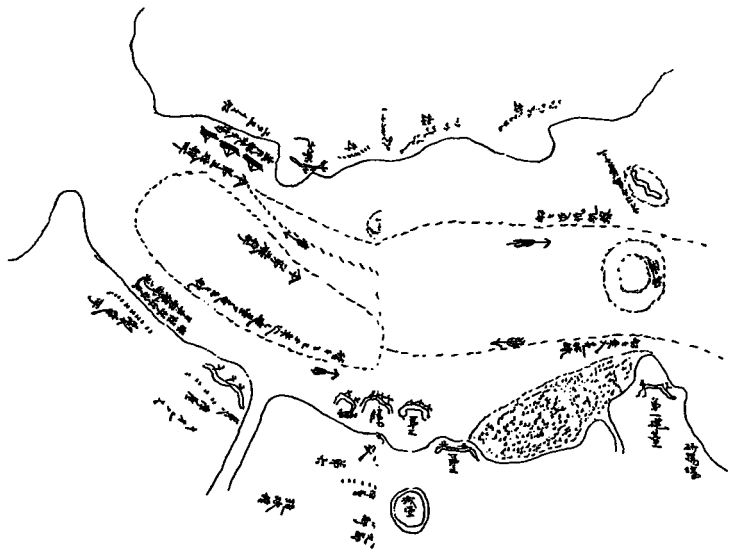
テ挑戦ノ形勢ヲ為セリ、此時味方ヨリ挽出シ日本蒸

氣船ヲ灰燼ト変セリ、其乗組之水主始ヨリ上陸セシ

メタリシニ、旧年欧羅巴へ赴キ日本使節官配下ニア

リシト覺タリ、高士官令耆人ノ士官ト共ニ味方之將
 船へ來リテ乗船セリ、ペルシユース船ハ其舟ノ敵対
 シタル砲台へ向テ砲戦セシニ、其砲發衆ニ勝レテ敵
 ノ砲台ヲ打崩シ、此砲台難カラスシテ隔ルヘシト見
 シ故、船ヲ転シテ剛勢ナル陸手ノ砲台ト砲戦シタリ、
 此時ニ當テ味方ノ全隊ハ敵ノ砲台十ヶ所ト其距離四
 百ヤルト二百ヨリ八百ヤルトマテ間ニシテ大ニ闘
 戦シ、將船二百ヤルトノ乏キニ進ンテ「北間市第八
 砲台ニノス」戦シテ争戦ヲ始メ、適宜ノ航船図面中
 点徴シタル筋也」ヲ伝ヒ、徐々トシテ砲台「第一砲
 台ニ砂揚向テ進ンタリ、此時間中ハ暴風烈敷黄昏之
 比味方ノ空丸ニ市街ヲ放火シ砲台三ヶ所ヲ撃鎮、全
 隊一同素之碇泊場へ□ケリ、レースホールス船ヲ砲
 台「第八砲台」前面二百ヤルト間ノ近キニ逢ンガ、
 水底淺ク過テ乗据シ故、ブリタニヤノ汚名ヲ残サシ
 ト力ヲ竭シテ此砲台ヲ打鎮メ、他ノ砲台ヨリ放發ス
 ト雖トモアルキユス船ノ援兵ヲ得テ、凡一時日本ヲ
 經漸々虎口ヲ脱タリ、此日味方ノ敗失ハ死亡拾耆人、
 手負三拾九人也、船ヲヨスリシ名此一戦ニ打死シ、

味方拳テ悲惜セリ、此人常ニ温和ニシテ衆人尊敬ス、
 戰場向フ時ハ鉄壁モ徹スノ勇猛アリト味方勵シ、進
 退ノ駢引モ亦希代ナリ、指揮役ウラルモット名ハ此
 船將ト共ニ本船ノ棧上ニアリテ、接戦ノ半敵ノ砲彈
 來リテ端舟ヲ打貫キ立地ニ兩人ヲ撃斃セリ、此時提
 督モ一同棧上ニ在シニ、幸ニシテ此砲彈ヲ脱タリ、
 此夜九字比市街ノ一方ニ焰光起リテ煙々タリ、翌日
 曜日七月二ハ晴天ナルカ故十一字比時船之投錨シタ
 ル海隅ニ於テ士官二人・水主七人ノ死骸ヲ水葬セン
 ト其委任ヲ下セリ、此事件畢テ味方ハ全隊ヲ纏メテ
 戦対シタル島ニ砲台之近傍ヲ過テ退ケリ、味方ノ隊
 ニテ敵地ヲ破烈セシ事廣大ニシテ、市街中ニアル城
 堡・製造所・武器庫、其余之倉庫焼失セシ事疑ナカ
 ルヘシ、砲台モ又尽ク破壊シ、前日交戦セシ砲台モ
 次日味方之船ニ退キシ時二ハ壹ヶ所ヨリモ放發セズ、
 焼亡シタル三艘ノ蒸氣船ハ其価洋銀二十四万五千枚
 ニシテ、亦日本ノ大船焼亡セリ、敵ノ鑄砲ハ十三イ
 ンチー及ビ八インチニシテ、百五十ポント四挺、八
 十ポント拾挺、其余ハ三十二ポント、前文ニ示セシ



如ク味方ノ全隊式百ヤルト百ノ近キニ進ンテ砲戦セ
 シニ、不思議ニモ味方ノ損害些少ナリ、尤、将船ニ
 ハ若干之破損アレトモ、多分ハ端舟及ヒ網具ノミナ

リ、船々ノ死傷ハ左之如シ、

コライユス船 死亡拾人 手負二十一人

ピールル船 同七人

アルキユル船 手負六人

コクウキフト船 死亡二人 手負四人

リースホールス船 手負三人

ヘルシユース船 死亡七人 手負九人

右新聞紙拔書和解、

亥七月

稲部禎次郎

岩瀬孫四郎

日史癸亥霜月中

目録

日史第二十九

文久三年癸亥霜月中

名越時敏(花押)

朔日 霜降、快晴、

朝六ツ起、五ツ前河侯仲太夫殿へ一刻参、直ニ出殿、今日者初テ之 御目見等有之、拙者ニモ奏者イタシ候、相良治部殿嫡子相良要之助殿・伊集院仲二嫡子伊集院藤十郎殿ニテ候、兩人共ニ首尾能相濟、外二人數四十人計之御目見人ニテ候、拙者ニハ八ツ退出ヨリ相良治部殿へ参候、要之助殿大鐘時分被帰、夫ヨリ吸物壺ツニテ挟肴ニテ盃取替シ有之、終テ夕方飯出、直ニ引取候、祝ト申候得者猥ニ酒量無限及酩酊者候処、初テ能キ祝ニ参候、別テ同意ニテ候、

相良家祝之儀、本文通ニテ相濟候事ト存居候処、夜入過ヨリ毎之通酒会相初リ候由、



皿なます

汁つみ入

漬物ミそ漬
菜つけ

あさつけ
せんきく
むやし

山芋一切
いせ海老一切
平
白くき菜
にんじん



梅肉ニ
魚さとふ摺ませ 飯
梅肉を盛りたる函

後菓子
高麗餅

夫ヨリ河侯仲太夫殿へ暮過ヨリ参候、今日仲次郎殿初而之 御目見ニ付テ也、仲次郎殿ニハ拙者元服イタシ置候訳ニ仍テ今日者是非参具候様承参候也、仲太夫殿ニハ 父上様竹輪之御友、嫡子新六殿ニハ拙者竹輪之友、惜哉新六殿ニハ兩年跡死去、仲太夫殿ニハ当年八十余才被相成候、未元氣、今日之 御目見頓ト安心ト大悦ニテ候、四ツ前帰宅、無程臥候事、木尾氏ニモ嫡子御目見ニテ父子入来、仲次郎殿ニモ同断、

二日 間々小雨、

朝六ツ起、今朝町田鷲之介殿入来候、
(斎修養女)
貞姫様御事、当月八日御上京ニ付御供三日跡被仰付候由、内分ハ先達テヨリ承知ニテ其節モ一刻被来、大坂へ注文イタシ置候日本外史モ此節下リ持来リニテ、代金ハ壺両ノ由候、四ツ時ヨリ祇園洲台場打ニ

参り候、物主ハ島津権五郎殿ニテ候、尤、東福ヶ城
台場・風月亭跡台場モ打方有之候、風月亭跡物主同
人、東福ヶ城物主(七礼カ)ニ礼舎人殿ニテ候、三男吉次郎・
四男徳熊ニモ参候、八ツ過帰宅、七ツ時分市江一寸
参候、一軒店出居候、祐定之刀目ニ付借入吟味共申
付候、疵坏ハ無之様ニ存候、今日打方有之候、大砲・
白砲等迄都合二十挺、一挺ニ付六発ツ、ニテ候、夜
入四ツ過臥候事、

三日 霜降、快晴、桜島当冬初テ薄雪、

今日之流鏑馬北郷哲五郎・野崎良八郎、朝六ツ起、
家内掃除イタシ候、四ツ前阿多源左衛門殿入来、同
道ニテ出宅、中途ヨリ相別レ拙者ニハ造士館ヘ相勤
候、今日ハ田代・平田大目付衆御見分有之、川上
龍衛殿ニテ、与頭ハ相良治部(長巻)・島津良馬ニテ候、八
ツ御下リ後退出ニテ良馬殿同道、良馬殿ニハ吉野橋
ヨリ相別レ島津求馬殿ヘ被参候由、拙者ニハ直ニ帰
宅、暮ヨリ二階ヘ嘉美行召呼嘶候、四ツ半臥候事、
一昨日之横山祐定之刀相求候、

四日 霜降、垂水山薄雪見ユ、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅イタシ居候得者、
七ツ過登殿ヨリ余リ淋シクイタシ居候間、嘶ニ来候
様申来候ニ付夕ヨリ参候テ、四ツ過帰候、九ツ前臥
候事、

一今日

(斎彬兼女) 貞姫様御首途有之、諏訪社福ヶ迫諏訪社ニテ候、

一此節初テ鑄製相成候六十封度巻挺ハ台廻リ迄モ御成
就相成候由ニテ、去月晦日磯 御飯屋下ニテ打拭(試カ)有
之、巖敷音イタシ候ニ付今和泉浜屋敷マテ見物ニ参
候処、余程失行遠ク相見得巖敷勢ヒニテ候、装葉ハ
十五斤ニテ為有之由候、筒迄ハ外二四五挺最早出来
居候由、

一今朝木尾彦左衛門殿・町田鷲之介殿、夕おとくと
一刻ツ、被来候、

五日 霜降、垂水山薄雪見ユ、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、七ツ時分ヨリ
主税同道ニテ市見物、今日迄ハ古金店漸三軒店相開

居候、二日之日一寸市ヲ通り候得者一軒店出居、夫
 二横山祐定長式尺壹寸余之小丈夫之刀相見得候ニ付
 相求置候、直刃ニテ随分見事成出来ニ候、誰モ客人
 等無之、四ツ過迄書見共イタシ、四ツ半時分臥候事、

御通達之写

今般類焼人数へ繰綿申受被仰付、追々片付最早十人
 余モ相残居、追々可申受候得共、過分本数候間引続
 諸人一同申受被仰付候、尤、追々相届候内直成高下

有之候ニ付、其株々直成通ニテ申受被仰付候、

一 木綿綿并裏木綿大坂直成ヲ以申受被仰付候筋被仰渡
 置候得共、品位不同ニ有之、同直成ヲ以申受候テハ
 親疎有之候ニ付、位心シ直成割并為致算当候処、別
 紙之通相及候間、右直成品位望次第申受被仰付候、
 尤、繰綿之儀モ適免印相濟候者モ余人へ致付属候向
 モ有之哉ニ相聞得候ニ付、類烧人数ニテ申受居候丈
 ニモ有之間敷候ニ付、類烧人数ハ勿論其外共諸人一
 同申受被仰付候、此段可申渡事、

一 縞木綿 百拾反

壹反ニ付 代錢三貫八百四拾八文ツ、

一同 八百七拾反

同 三貫六百四拾八文ツ、

一同 五百八拾反

同 三貫三百文ツ、

一同 貳百反

同 貳貫七百文ツ、

一同 百八拾反

同 貳貫三百文ツ、

一同夜着縞 六拾反

同 貳貫三百文ツ、

一 裏木綿 四百七拾五反

同 貳貫八百四拾八文ツ、

一同 六百三拾五反

同 貳貫五百六拾四文ツ、

一同 千三百七拾四反

同 貳貫六拾四文ツ、

一同花色 七百五反

同 貳貫四拾八文ツ、

一同 四百四拾反

同 卷貫七百文ツ、

右之通各被得其意、此書付刻付ヲ以致廻達、留ヨリ
但馬方へ返納可有之候、

十一月四日

先日組方書役旅跡寄被仰付候人数

竹迫彦左衛門

森岡弥七郎

武元伊右衛門

有川壮太郎

勝部謙助

山本権之助

加世田弥右衛門

指宿五左衛門

異船来着之節御定之事

一 打揚ニテ居宅、

一 早鐘ニテ御定之場江繰出、

一 戦争之模様候ハ

御両殿様千眼寺

御本陣、

但、三郎様御旗本六組(新照院カ)新昌院、

太守様御旗本五組(忠義)八川田将監辺、
(佐武)

太守様御旗本之内、島津仲一隊者(久房)函書殿へ被召付
(島津久造)

候二付、

御本丸へ居残御番所辺相堅、

右之節、函書殿為 御名代御登

城諸差引被成候事、

一千眼寺へ両

御本陣被召居候テ、両御旗本繰出相濟候ハ

御城下守衛

御城内外相堅候事、

不時御備立 御覽之節、

御出馬又ハ御名代等ニテ御門ヨリ 御旗相見得候ハ、

惣テ折敷罷在、

御床机廻ヨリ馬へ乗付候ハ、惣テ乗付、押太鼓相鳴

候ハ、御先手ヨリ順々繰出、掃陣之節モ御定場へ参着、折敷罷在、押太鼓打止 御床机廻惣テ下馬、再押太鼓ニテ御引入有之候ハ惣勢御暇之事、

申請
代錢貳拾八貫四百八拾四文
綿百目二付

異変之節相図之儀者夫々被究置候通之事候得共、早鐘迄ニテ、此節体勢揃之儀者遊兵モ罷出候ニ付、組々什長ヨリ相図、組頭へ届申出候ハ、勤場へ罷出、勤方無之者ハ御城下守衛場ニテ 御殿下へ罷出、御掃殿迄控居候様可相心得候、依時宜ハ右人数可被召列儀モ可有之候、

右ハ今般兵火ニ付類焼之面々、冬向ニ相成難渋之向モ可有之候ニ付、木綿縮并繰綿大坂御買下ニテ望之人へ申請被仰付候賦ニテ、此節綿之儀ハ百五拾本相届候ニ付、則ヨリ諸士以上へ申請被仰付候条、望之人ハ差出相認、御勝手方御用人座へ差出候様可被申渡事、

一不時調練之節六組トモ御賄可被成下候、

右可申渡候、

十月

(島津久敏)
大藏

右早々可被申渡候、以上、

但、一人分ツ、掛渡候テハ手数ニモ相掛候ニ付、成文申請一本ヲ三人五人其上ニモ望之員数賦申請致配分候様、連名ニテ差出相認差出候様有之度候事、

十月下旬 御通達之写

千五百本御買下之内三百本株久吉丸積下、

右之通支配中へ早々不洩様申渡、本文来ル廿一日限り返納可有之候、以上、

⑨印

繰綿百五拾本

半朱琉球通宝

壺本二付正味六貫三百目入

但、大丸形象字

右者新規鑄造被仰付候二付、

御領國中并琉球共壹朱銀壹切之場ニ式枚ニテ通融被仰付候条、今日ヨリ御蔵々入私ハ勿論諸人致取遣候様被仰付候、此旨支配中江申渡、奥掛・表方へ相達、諸郷・私領へモ可申渡候、

九月十七日

(島津入敷)
大蔵

下之関異麥村上銀右衛門ヨリ御注進申上候書付之写以鳥渡啓上仕候、然者昨夜下之関へ長州御藩中凡百人浪士百五拾人程ニテ喧嘩出来、四五人モ即死、手負夥敷由ニ御座候、

一長門守様一昨日下午之関へ御出後、昨日下午之関筒湊等御座候由、兎角小倉へ仕掛參申候風舌御座候、依之甚心配之時節ニ御座候、

一筑前若殿様近日 御上京之由程次第二八下之関御通りハ無之、豊前中津辺ヨリ芸州へ御渡海ニモ相成候敷モ難計風舌モ御座候、尤モ碇ト難申上候間御含迄ニ御座候、只今式日御便ニテ甚荒増略文之段御免可被下候、以上、

八月十九日

村上銀右衛門

中村善兵衛様

中村吉左衛門様

田原与兵衛様

尚々長州若殿様御事、実否未定之御座候、

六日 霜晴、夜入暫雨、

朝六ツ起、毎之通掃除、四ツ前造士館へ出勤、四ツ過和田・高田大目付衆御見分ニテ、島津良馬・拙者組頭ヨリ兩人相勤候、御目付ハ名越彦太夫ニテ候、八ツ退出、直ニ帰宅、七ツ時分ヨリ吉次郎・徳熊召列市見物イタシ、夫ヨリ野屋敷へ參候、藏迄明書物箱式ヲ持帰候、七書直解・四書正解・史記ニテ候、帰掛町田藤八殿へ一刻立寄候、明後八日
(音形兼女)
貞姫様御供ニテ被致上京候二付、驗迄ニ饒別之紙包共致持參候、直ニ帰、夜入前帰宅候得者市来之山之口半兵衛来居候、召仕置候よし母病氣之由ニテ一日暇申出、明早朝半兵衛同道之由候、夜入り四ツ時分臥候事、

一磯御飯屋下ニテ又六拾封度打拭有之候、(試カ)最早六拾封度ニ挺成就相成候、

御通達之写

当時疱瘡流行ニ付テハ難痘相煩者有之由、

右為御救此節別段以

思召鶴油諸人申請被仰付候旨

御沙汰被為 在、誠ニ以難有

御仁慮之御事候条、申請度面々ハ御製薬方へ相付可

願出候、此旨向々へ不洩様可洩様可致通達候、(マヤ)

十一月

大藏
(川上久通)
但馬

七日 霜降、桜島積雪、過央晴、

朝六ツ起、掃除毎之通、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、

松岡喜左衛門殿入来、今朝ハ町田藤八殿入来候、夜

入四ツ時分臥候事、

八日 霜降、当冬始氷、桜島雪残、快晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ半御暇ニテ帰宅、市へ

見物ニ參候得共、未三四軒位店モ明居、見物モ無之

無程帰候、夫ヨリ唐紙一枚ニ(忠良)日新公以呂波御詠歌

四十七首ヲ相認候、一枚ハ家鴨馬場郷中学校所希賢

堂掛物ニイタシ度由、先達テヨリ逢頼候ニ付乍悪筆

認候、夕ヨリ美代藤兵衛殿入来候、家来之瀬戸山庄

太郎・同助市・同龍吉三人ト同家来白浜伊左衛門ト

聊之儀有之、伊左衛門少々手疵付候ニ付、瀬戸山三

人召呼美代氏ヲ以口柄ヲ聞候、今夜ハ三人共此方へ

留置候間、番人トシテ前家来塩田武右衛門・野元休

次郎・白浜孝兵衛・福留兄弟、屋敷内ヨリ岸良喜右

衛門・川村助市、番所ヨリ兩人付居候、夜八ツ時臥

候事、

一貞姫様御事、今五ツ時御立 御上京ニテ候、(齊彬養女)

九日 霜降水、快晴、桜島雪残、

朝六ツ起、掃除屋中不残、四ツ前ヨリ造士館へ出勤、

八ツ過帰宅、市へ一刻參候、暮過ヨリおこととの入

来、郷十郎同断、明日ヨリ谷山屋敷へ四五日被參之

由候、内膳ニモ一日ハ谷山屋敷迄来、源左衛門殿石塔建立之賦候由、時宜ニ依候テハ郷十郎ハ指宿迄参由候、おこととの無程被帰、四ツ過臥候事、

十日 霜降水、快晴、桜島雪未消、

朝六ツ起、屋中掃除毎之通、四ツ前出勤、四ツ過ヨリ演武館へ出候、梅田家大目付見分、帰ニ登殿へ参リ、八ツ前帰宅、又市見物イタシ、夫ヨリ花舜軒御墓参、夫ヨリ直ニ帰宅、今朝川上彦太郎殿入来、八ツヨリ相良市之進殿入来、夜四ツ時分被帰、九ツ時分臥候事、

十一日 霜降、曇、

朝六ツ過起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ町田民部殿江参候、平太左衛門其外四人痲瘡ニ付見廻候、皆共輕痘ニテ候、八ツ半時分ヨリ田尻善左衛門殿へ一刻見廻、直ニ帰宅、夫ヨリ又々市見物イタシ暮前帰宅、四ツ時分臥候事、

一先達テヨリ池修甫イタシ、二池之分ハ先成就相成候

ニ付水掛候事、

十二日 朝小雨、後晴、

朝六ツ起、屋中掃除毎之通、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ帰宅、七ツ時市見物、夕帰宅、今日刀タンス相求候、引出式ツ有之、夜入四ツ時分臥候事、

十三日 薄霜、晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、夫ヨリ家来下人召集庭取集、且畠モ草取等イタシ候、夜入四ツ半時分臥候事、

御通達之写

明後十五日五ツ時御供揃五本御道具、

御着服御服紗物・御半袴被為召、 桜之間・御中門・

北御門

御出、稻荷社へ

御参詣、夫ヨリ

御棧敷へ被為

入

御厄年并

^{（久光）}
三郎様御旅中御安全流鏑馬

御視、畢而

御出口之通被遊

御帰殿答候条、御供触等之儀トモ可承向へ可申渡候、

十一月十三日

将監

十四日 霜降、快晴、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ上演武館へ出候、加藤大目付

衆御見分ニテ詰二候、一人ハ島津仲、大目付衆高橋

縫殿殿ニテ候、劍術・柔術・居相拭合有之、^{（試力）}九ツ半

時分相済帰宅、今日者拙者御実母於直様御法名法成

院様御正忌日、殊ニ当年廿五回忌被為当候得共、御

法事ハ当夏得宜院様ト一所相混イタシ置候、然レト

モ御香奠・野菜・饅頭等花舜軒へ遣候而別段ニ御經

相頼置候、八ツ前御墓并花舜軒御位牌參詣、帰ニ着

替共イタシ一刻市へ參候、暮前ヨリ武之橋川上家ヨ

リ明日御厄^{（流鏑馬カ）}流鏑馬為見物お藤・おくわ来留候、拙家

内人数ハ明日大興寺上ヨリ見物之筈ニテ今晚野屋敷

へ參留、拙者ト主税殘候、然レトモ明日者自拙者共

ニモ見物之賦候、四ツ時分臥候事、

十五日 霜降、昼暫雪降、晴、

朝六ツ前起、今日流鏑馬行トシテお藤杯七ツ半時分

ヨリ起、仕廻方・飯焚等賑々事二候、六ツ過ヨリ拙

者ニハ野屋敷之様參候テ、拙者家内中其外野屋敷人

数中稻荷社後上之方島ニ流鏑馬見物トシテ出候、

上様ニモ五本御道具ニテ御出、

御棧敷近ク候間、拙者ニハ別テ相敬シ、山之蔭ヨリ

相視候、四ツ時初リニテ九ツ半時分相済候、射手人

数左之通、

乳人

矢野仁右衛門

児

山田権兵衛

児

西田源助

上馬

児

新納喜藤太

川上金次郎

射手

島津藤十郎

落馬

河野外記

徳永周左衛門

坂本弥之助

迫水孫次郎

佐多正之助

大山彦之丞

野崎良太郎

阿多孫次郎

新納太右衛門

弓張切

高崎喜七郎

村橋宗之丞

新納盛之助

伊木七郎

山元伊之助

新納宗太郎

知識彦左衛門

大山弥九郎

落馬

田中蘇八郎

四本甚七

北郷哲五郎

喜入多門

最上佐一郎

安藤八郎左衛門

国分市郎右衛門

伊集院半之丞

西田要之進

入来院恰

伊地知嘉右衛門

鎌田奎之丞

岩切彦兵衛

東郷源四郎

新納十郎

山田健

喜入雄次郎

川上十郎左衛門

相濟野屋敷へ参候而諸下知共イタシ、暮帰宅、お藤

井おくわ・おふみやふさめヨリ来泊、主税ニハ大乗院之内棧敷ヨリ見候由、流鏑馬掛島津助之丞殿・

二階堂弥九郎殿被来候由、夜入四ツ過臥候事、

十六日 木々迄誠之薄雪、

朝六ツ起、思ヒヨラス雪積リケレハ

夜のほと八月さへわたり明て今朝

おとろかれぬる庭のはつ雪

四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、無程前へ一刻参、夫ヨリ市見物、七ツ過帰宅、暮過ヨリ家内中お藤・おくわ・

おふみなと打寄、嘉太郎着袴祝之取肴ナト貰ヒ候ヲ

ヒラキ候、四ツ過臥候事、

十七日 雪一寸計積、

朝六ツ起、無程宮里喜次郎殿被来、家内中二階へ打

寄身温メニトウフナト煮、酒少々給候、五ツ半時分

ヨリ上演武館へ出席、白尾戸後右衛門・坂本簾四郎

流儀大目付衆御見分ニ付テ也、九ツ過相済、夫ヨリ

市見物イタシハツ前帰宅、お藤ニハ京都ヨリ左右有

之品ナトモ来候間帰宅様申来、大鐘時分帰宅候、夜九ツ過臥候事、

一市ヨリ赤銅色合有之仁王之目貫大小并金ノシキセアシロ之縁頭一ツ相求候、

十八日、霜、桜島其外峰々雪不消、

朝六ツ起、四ツ前出勤、四ツ時ヨリ造士館へ出席、

講訳ハ久保田新次郎殿ニテ候、夫ヨリ演武館ニオヒ

テ篠崎七郎左衛門・東郷長左衛門流儀大目付衆御見分有之相詰候、又造士館へ相勤、八ツ時退出、直ニ

帰宅、又市見物、夜九ツ時分臥候事、

十九日 雪雨、四方山嶽々積雪不消、

朝六ツ起、四ツ前戸柱町田家へ一刻参候、四ツ八ツ

出勤、帰宅、無程辻元新兵衛来、焼酎共給候テ夕方

帰宅候、風呂立候ニ付暮ヨリ前おむら様へ申上候テ御

入来、四ツ過御帰、九ツ前臥候事、

二十日 雪雨、積雪昨日同断、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ後退出、帰掛平佐おつ

やさまへ罷出酒飯共頂戴、八ツ半時分帰宅、玉目三
奴五分ヒス鉄炮式挺払物鳥渡相見得候ニ付、二挺共
ニ相求候、夜入四ツ時分臥候事、

二十一日 曇、積雪同断、夜雨、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ造士館へ出勤、今日者甲子之
日ニテ聖誕日故、四ツ時御供揃五本

御道具ニテ聖堂へ御参詣、直ニ

御帰殿、今日者造士館諸会読相止何モ無之候ニ付、

詰兼良馬殿同道ニテ市見物、権五郎殿同断、夕帰宅、

九ツ時分臥候事、

二十二日 曇、残雪同断、

朝六ツ起、四ツ時出勤、九ツ時分御暇、段々用事有
之候ニ付野屋敷へ参候テ、八ツ半時分帰宅、帰掛市
見物ニテ無程帰宅、福留平左衛門遣シ市ヨリ鉄地之
縁頭ニ金ニテ菊ニボリノ細工、鐔ハ鉄地ニ銀之桜居
有之細工ヲ求候、且鉄金物多クイタシ三重鎖オロシ

之箱巻ツ求候、夜四ツ過臥候事、

二十三日 霜、嶽々雪未消、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、出勤掛平佐へ一刻立寄候、
夜四ツ過臥候事、

二十四日 霜如雪、嶽々雪同断、

朝六ツ起庭掃除、造士館へ四ツ八ツ出勤、講釈ハ今

藤勇助殿ニテ候、直ニ帰宅、大鐘比ヨリ鳥権五郎殿・

葉丸猪之介殿・宫里十兵衛殿・美代藤兵衛殿入来候、

おつや殿・おむら様御入来ニテ候、お藤・お筆モ来

ル筈候処、兩人共支到来之由候、徳熊着袴ニテ候、

十五日ニハ流鏑馬見物ニテ候故、今日氏神祭之序ニ

着袴イタシ候、後ハ銘々踊坏有之、賑々敷事ニ候、

各四ツ過ニモ被帰宅半、無程臥候事、

二十五日 霜氷、嶽々雪未消、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ登殿へ参候、
先達テ住居修甫等イタサレ候処、成就相成候テ近親

被相集、拙者ニモ参候様承候ニ付テナリ、外二三原次右衛門殿・伊集院喜左衛門殿・用頼永井喜左衛門殿・本田吉次郎殿ニテ候、夜九ツ時帰候、無程臥候事、

二十六日 薄雪屋上迄、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ造士館へ出勤、八ツ退出、直ニ帰宅、又市見物、七ツ過ヨリ町田少輔殿・川畑道水殿被来、辻元新兵衛ニモ来候、お筆ニハ四ツ時分ヨリ来居、夜九ツ過被帰候、無程臥候事、

二十七日 霜、昼雪降、

朝六ツ起、四ツ前出勤、今日者初テ之御目見習礼有之、拙者ニモ奏者相勤候、八ツ後退出、市見物ニ参候処、塵添壘囊鈔十冊取寄候テ見候得ハ、間々見合ニ相成事有之故、夜九ツ時分迄ニ見仕廻候、取ルヘキ処へハ驗シイタシ明日書拔置候賦、九ツ過臥候事、

二十八日 霜降、晴、桜島雪弥積、

朝六ツ起、四ツ時出勤、九ツ前御暇、島津良馬殿同道ニテ帰掛ニ肩ヲ取候テ市見物イタシ、直ニ帰宅、夫ヨリ昨日之塵添壘囊鈔十冊之内群書輯録十八之巻ヘ七ツ時分迄ニ書拔候テ、又々一刻市へ参候得ハ、拙者拾五六才之時分ヨリ無之銅地ニ藤貝之ソフガン有之候小柄見当リ則相求候、三十年振計ニ小柄・かふ貝相揃珍ラシキ事ニ候、夫ヨリ七兵衛申付藏明サセ米藏見分イタシ候、今朝木尾彦左衛門・指宿猪之介殿、夕松岡喜左衛門殿被来候、夜四ツ半臥候事、

二十九日 霜如雪、快晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、今日ハ御目見習礼ニテ若年寄見分有之、御家老衆・大目付衆ニモ御出席、拙者ニハ本田孫次郎拜領之御腰物渡シ又十人之中紙奏者ニテ候、八ツ後退出、帰掛平佐於つ屋様へ一刻立寄、又前之内記様へモ一刻罷出帰宅、市へ一刻参候テ~~山~~之掛物一幅、句ハ

西風落葉は、薄暮

鐘声送夕陽酒醒不

去過夜開門滿地天

如霜

支門しもん□□

并葉箱はなばな沓くつツ、鉄小柄銀ニテ車くるま式しきツ、金ニテ藻之如キ
モノソフカン有之候ノ沓くつツ相求候、七ツ過ヨリおミ

ち様・葉丸家か、殿・猪八郎殿被来候、夕被帰候、

おみち様ニハ夜四ツ前御帰、九ツ過臥候事、

日史第三十

名越時敏(花押)

文久三年癸亥十二月申

御月番

(島津久盛)

大藏殿

御軍役方右同

(喜入久高)

撰津殿

御勝手方右同

撰津殿

御用人右同

若年寄右同

二階堂源太夫

出雲殿

入来院恰

大目付右同

縫殿殿

朔日 霜如雪、桜島其外嶽々雪不消、快晴、

朝六ツ起、五ツ時出勤、今日者初テ

御目見ニテ八十人余有之、四ツ時

御出座、元服之御礼、本田孫次郎江

御腰物渡シ相勤候、御納戸奉行伊集院周八ヨリ相受

取候テ相渡候、又中紙進上九人之奏者拙者相勤候、

林雄齋・村田笑八郎・平田源左衛門・佐々木新左衛

門・奥山金之丞・牧仲之進・川崎兵十郎・左近允喜

兵衛・時任右八郎ニテ候、今日ヨリ川上右膳殿月番

相勤候、右膳殿ニハ親類樺山相馬殿所へ病人有之、

昨日ヨリ参泊之由、今日ハ相頼候段申来候、明日モ

又何分可申卜之事情、八ツ過御下り後退出、直ニ帰

宅、夫ヨリ野屋敷へ一刻参候、夕帰宅、木尾彦左衛

門殿今朝ヨリ入来候テ屋敷内取集加勢、暮ヨリ塩田

清次郎来、各四ツ過帰ニテ候、無程臥候事、

二日 天氣昨日同断、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ過御下り後退出、月番

引合川上右膳儀親類へ病人有之、月番不被得相勤候

二付、島津良馬殿月番来正月ニテ候処、繰替ニテ今

日ヨリ被相勤候、夜四ツ半時分臥候事、

一 当分相勤居進達掛席順

川上弥八郎

新納十郎

園田与藤次

土持拾之介

伊藤郷十郎

四本喜兵衛

弟子丸矢一郎

村橋宗之丞

肝付新太夫

阿多甚五左衛門

迫水孫次郎

与方
一 書役席順

志岐藤九郎

園田八十郎

町田八郎左衛門

石原真助

市来十左衛門

山田覚助

木藤源左衛門

神宮司筑兵衛

有馬甚左衛門

税所市兵衛

染川伊兵衛

永山清右衛門

蒲生才助

川上十郎太

海江田善右衛門

木藤市助

福島仲左衛門

久保喜右衛門

坂元新助

加世田弥右衛門

川上八十次

指宿五左衛門

久留助四郎

山本庄之助

松元覺之丞

柴助十郎

村田林兵衛

福島助之丞

三日 晴、暖氣、

西郷藤左衛門

朝六ツ前起、五ツ半(出勤脱カ)後退出、直ニ帰宅、逼塞・

林正之進

赦免有之、進達掛山田太右衛門殿・書役大山源五郎

税所市左衛門

殿被来候、相濟直ニ野屋敷へ参、暮前帰宅、四ツ過

山本勘兵衛

臥候事、

赤松甚兵衛

大山源五郎

四日 快晴、暖氣、

伊集院源吾

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、七

西之原彦助

ツ時分ヨリ宫里喜次郎殿相頼大島書状認方相頼候、

竹迫彦左衛門

八ツ後伊喜美原来、明日ハ山川へ相下ル由承候、夕

森岡弥七郎

ヨリ木尾彦左衛門殿被来封物等加勢、彦左衛門殿・

武元伊右衛門

喜次郎殿夜入四ツ過被帰候、無程臥候事

有川壮太郎

山本権之助

覺

一書状六通

一茶入紙袋六ツ

一小紙包五ツ

右、銘々名前上書アリ、

藤由氣

厚潤書状巻通
茶一袋

清須美

柏武仁説

(統カ) 林嘉多
範庸連名

(惠貞連名)

右之通明早朝伊喜美原方ヨリ届方相頼賦、尤、今日

直ニモ相頼置候、

五日 七ツ過ヨリ少々雨降、暖氣、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ川田将監殿へ一刻參候、木尾

彦次郎表坊主之願申上置候、尚又相頼候、夫ヨリ民

部殿へ參、四ツ時出勤、八ツ半御下り後退出、今日

飛脚立ニテ候故歟、少シ御下り遅ク候、帰宅候得者

馬之子引来居候ニ付、主税ニモ為乘、自分ニモ乘(試)拭

候、夫ヨリ直ニ野屋しきへ參候、暮帰宅、夜四ツ過

臥候事、

御通達之写

米価不及沸騰様トノ儀ハ追々申渡置候処、近比ニ至
リ弥騰貴、物価モ右ニ準候様相聞得、

御領内迄之事ニテモ無之、諸国一同之由、無是非勢

ニハ候得共、折角諸人融通宜様第一之事ニ候、然ニ

士分以上所持高取納米代銀引結之儀モ、時々通融之

直成ヲ以無高下致引結候様先度モ申渡置候得共、間

ニハ別テ過當ニ致引結候者有之、名前等モ相聞得別

テ如何之至候、且又米価高料致売買間敷ト之趣モ申

渡置候得共、是以同様之向候由、方今之世態汲受、

薄処ヨリ当座之利欲ニ迷、右之次第二相及候半、士

分不似合事ニテ畢竟義理之心無之故ニ候、我心ニ立

返リ可恥儀ニハ無之哉、何レ士以上ヨリ廉恥之風俗

下々へ推移儀肝要之事ニ候間、此節迄ハ御宥恕ヲ以

其儘被召置候間、以来心得違有之間敷候、乍此上不

守之者ハ屹ト可被為及

御沙汰段

御内沙汰被為

在、追々被仰渡置候

御趣意畢竟汲受、薄処ヨリ米価及沸騰物価モ右ニ準

候様成立、併此節迄ハ 御宥恕ヲ以其儘被召置ト之

儀共、誠以難有御事ニ候、士分以上之儀下々之目当

ニモ相成事候処、右様当座之利欲ニ迷ヒ、士分不似

合之儀共有之候テハ自然ト一統之風俗ニモ相拘、別

テ不可然事ニ候条、一同謹テ奉承知、誠実ニ心ヲ用

御趣意之程屹ト相守、諸人融通相成候様可心掛候、

此旨支配中へ申渡、奥掛・表方へモ可相達候、

十二月

(音入久高)
摂津

六日 霽、冷氣アリ、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、無

程美代藤兵衛殿入来、夜入五ツ過被帰候、四ツ過臥

候事、

一明日ハ御城下守衛入来院恰・川上東馬両組於砂揚場

訓練場四ツ時 御供揃ニテ訓練御覽被仰渡候、則ヨ

リ諸手当有之、恰組ハ大砲隊ニテ候得共、小銃携罷

出候様御軍役奉行折田平八ヨリ承知ニテ候事、

七日 終日雪天、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、大

鐘比ヨリ曾木之川島清右衛門来、夜入五ツ時分帰候、

四ツ時臥候事、

覚

五番組小与一番岩崎方限

種痘人数四拾八人

右同小与二番冷水方限

右同八拾人

右同小与三番紙屋谷方限

右同百五拾六人

右同小与五番堀内馬場方限

右同百老人

右同小与四番福ヶ迫方限

右同八拾三人

右同小与七番上之馬場方限

右同六拾四人

右同小与八番廻り方限

右同五拾六人

六番組小与五番後迫方限

右同四拾七人

右同小与七番福昌寺門前方限

右同七拾老人

右同小与八番韮韮^(種相力)方限

右同貳拾貳人

右同小与九番吉野中之別府方限

右同四拾五人

右同小与二番町口方限

右同貳拾七人

右同小与三番一ツ橋方限

右同拾八人

右同小与六番吉野方限

右同百拾五人

右之通方限種痘植付方相濟申候間、此段御届申上候、

以上、

亥十二月七日

上方種痘掛
醫師

覚

壹番組ヨリ四番組迄

種痘人数凡八百五拾人余、

右之通種痘植付方仕申候、此段申上候、以上、

十二月

下方種痘方掛
醫師

種痘人数

上方九百三拾貳人

下方八百五拾人余

合千七百八拾貳人

貳番組小与二番三番人数未相分除、

八日 屋上計薄雪、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ後退出、直ニ帰宅、

夕方迄島へ出菜園諸下地、夕ヨリ木尾彦左衛門殿入

来、四ツ時分被婦、無程臥候事、

九日 霜降、快晴、

朝六ツ起、今朝伊藤彦助殿一刻入来候、四ツ八ツ出

勤、逼塞申渡有之、八ツ後進達掛村橋壮之丞・書役

有川壯太郎被來候、御用罷出候人吉野ニテ候処、夜五ツ時迄被待候得共不被罷出候ニ付、又々御用觸為持遣、一先進達掛・書役被引取候、然処觸為持遣候者御用之人ト中途ニテ行違候由、昼之御用觸滯候テ夜五ツ時承知、直ニ罷出候由、則村橋壯之丞申遣、四ツ半時分相達、九ツ時分隊候事、

十日 霜降、曇、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、無程花舜軒御墓參、夫ヨリ伊藤六郎右衛門殿・戸柱町田家・前之内記様へ參候テ暮前帰宅、夫ヨリ自家規模帳草案取掛候テ、九ツ時分隊候事

十一日 間々雨、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ過退出、直ニ帰宅、馬手入諸下地其外屋敷内諸下地、暮過ヨリ書見、四ツ時分隊候事、

十二日 曇、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、鉄炮洗等イタシ候、夜四ツ過迄書見、四ツ半隊候事、

一今朝今日四ツ時御供揃本御道具、御馬ニテ、桜之間・御中門・北御門

御出、磯御茶屋へ被為

入被遊

御逗留答候、此旨御役人限并詰衆御役人並へ可致通達旨被仰渡候、御通達來候ニ付書写致出勤候、

十三日 晴、大寒入、今日ヨリ却テ暖、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、夫ヨリ暮迄薪割、夫ヨリ書見、九ツ前隊候事、

一今日ハ主税トウテオシイタシ、未随分拙者方強ミ有之候、拙者小男、主税中男、拙者四十五才、主税十七才ニテ候、

十四日 昼過ヨリ雨、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、帰掛浄光明寺へ參詣、八ツ半帰宅、御座書役川上八十次殿・同竹

迫彦左衛門殿入来候、七ツ時ヨリ民部殿へ参候、夜四ツ時分帰宅、外ニ鳥津良馬殿被参候、有馬甚左衛門トノ被来居候、今日ハ磯御茶屋ニテ水雷御覽、夫ヨリ調練場へ御出ニテ烙丸

御覽之由候、

御通達之写

御領内海岸防禦御手当向ニ付御拝借金御願立有之候
処、十月廿八日

太守様(忠義) 御名代ニテ 御一類様被為

召、戸田淡路守様御登(氏息)

城之処、御金七万両御拝借被仰付旨、御用番水野和(忠)

泉守様ヨリ被仰渡候段申来候、依之御二方・島津因(忠)

書殿・諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明十五日

御礼後居残

太守様・三郎様(久光)へ御祝儀於席々謁可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上来候面々ハ当日又ハ

御精進日間被申上、江戸へモ有来通追テ飛脚便被

申上、御女中方之儀ハ同断可被申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

十二月

(鳥津久衛)
大藏

十五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ後退出、正月祝物道具共取調、二階へ出シ埃打払、フキ方等イタシ候、相

良吉右衛門殿入来、暮被帰候、夫ヨリ書見、今日ハ

屋敷内へ此節垂水屋敷ヨリ下り候七左衛門姉移居候

所へおたね・吉次郎・徳熊来呉候様申由ニテ、大鐘

比ヨリ参候テ六ツ半時分帰リ、ミヤ物トモ有之、給

候而四ツ半時分臥候事、

十六日 快晴、

朝六ツ過起、御座書役寒中見廻トシテ西郷藤左衛門

被来候、四ツ八ツ出勤、帰宅、八ツ半時分ヨリ召仕

之家来・下人惣テ呼出シ島手入トモイタシ、暮ヨリ

書見ドモイタシ候処、平佐おつ屋さまヨリ来候様申

来候間参候、おたねニモ昼ヨリ参居、権五郎殿・お

広との・猪之介との被参居、九ツ過帰候事、

十七日 間々小雨、

朝六ツ過起、四ツ八ツ出勤、今日者月番引合島津良馬殿頼度由ニテ早々ニ帰、老人ニテ月番相勤候、八ツ後退出、直ニ帰宅、今朝大庭猪之介殿入来候、拙者ニモ出勤掛平佐へ一刻参候、七ツ時分ヨリ野屋敷へ参候テ板藏明候テ掛物或ハ三方等持帰候、夜入書見、四ツ過臥候事、

十八日 間々雨、

朝六ツ過起、朝之内高江之脇岡太郎左衛門来候、庄屋惣望ニ付内意申呉候様承、伊東次郎右衛門殿ニモ入来候、川上八十次ニモ来候、宮里喜次郎殿同断、五ツ半出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、町田八之進殿ニモ指宿ヨリ帰之由ニテ被来候、夜入前おむら様御出ニテ、四ツ過御帰ニテ候、無程臥候事、

十九日 雨、

朝六ツ過起、四ツ八ツ出勤、帰宅、アンドン張ドモイタシ候、七ツ時分ヨリ千石馬場町田家おふて来、

夜四ツ前帰候、四ツ半時分臥候事、

二十日 間々雨、

朝六ツ過起、五ツ半時分前内記録へ一刻罷出候、出勤掛立寄呉候様承候テ参候処、御役御断之一件ニテ候、先度願書被差出候処、今一往養生イタシ候様御承知ニテ、桜島黒髪湯池へモ御出候得共、足痛寸切ト無之、又々被差出度ト之事候、願書御受取申上、夫ヨリ登殿へ一刻参候テ出勤、佐志島津壬生殿(久清)へ御殿ニテ内記録御断一件相談イタシ候テ、御用人二階堂源太夫へ取次願書差出候、八ツ後退出、一刻帰宅候テ花舜軒御墓へ参詣、帰宅候得ハ市来半之丞殿・川北孫左衛門殿・藤田喜次郎殿・高江之脇岡太郎左衛門被来、各々銘々之用事承候、暮過ヨリ前内記録へ罷出、四ツ時分帰、無程臥候事、

二十一日 雪降、桜島雪積、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、帰宅、障子張イタシ四ツ過臥候事、今朝基太村新次郎殿入来、八ツ後伊東次

郎右衛門殿入来候、

二十二日 間々雪降、桜島昨日同断、

朝六ツ起、二階書院其外掃除、五ツ半出勤、八ツ半退出、直ニ帰宅、夜四ツ過迄名札書、昼おこと、の
入来、今朝新次郎殿入来、四ツ半時分臥候事、

二十三日 快晴、桜島雪残ル、

朝六ツ起、二階掃除、五ツ時分ヨリ花岡・日置・菱
刘家・町田家へ参、梅田家同断、四ツ八ツ出勤、直
ニ帰宅、昨夕ヨリ徳熊不塩梅ニテ臥居候間終日付居、
夜七ツ時臥候事、徳熊病氣ハ風邪歟痲瘡歟ト見ル様
有之候事、種痘イタシ居候ニ付、定テ風邪ニテ可有
之、

二十四日 霜降、快晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ後退出、夫ヨリ野屋
敷へ参候テ諸下地、蔵ヲ明、夜具并年首入用之品々
為持返シ候テ、暮前帰宅候得者徳熊未不宜、嘉美行

療治ニテハ些無覺束存候ニ付、沖雲泊殿へ申遣候処、
折柄留主ニテ親父瑞雲殿參被呉候、却テ仕合ニテ暫
被相啺被帰候、四ツ半時分臥候事、

二十五日 快晴、朝大霜、

朝六ツ過起、朝基太村新次郎殿被来候、四ツ八ツ出
勤、直ニ帰宅、徳熊弥痲瘡トハ相見得候得共種痘イ
タシ居候故、別テ之輕痘面之内十計モ相見得候得共、
惣テ格別進ミ不宜、皆枯ソフニ相見得候、気分モア
マリ悪敷モ無之、食事等粥ニ盃計ツ、ハ終日二三度
給候、シカシ三日臥居候故アマハハ矢張痲瘡人之格
ニ有之候、夜九ツ時分臥候事、

二十六日 大霜、快晴、

朝六ツ前起、六ツヨリ野屋敷へ参り年首入用之品々
其外夜具等持帰候、夫ヨリ指宿内膳殿へ遣候書状并
品々取揃今朝遣候、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、八ツ
後川北孫左衛門殿入来、無程被帰候、夜入沖雲泊殿
入来、徳熊痲瘡見貴候、至テ之輕痘ニテ食事モ何ソ

餅米等用候ニハ不及、当分通ニテハ種痘イタシ居候故、余程夫カ加勢相成唯流行ヲ少々感シ候迄之事ト承候、夜四ツ過臥候事、

二十七日 大霜、晴、

朝六ツ過起、四ツ八ツ出勤、徳熊弥氣元宜、夜四ツ過臥候事、夜ニワ餅切共イタシ候、

二十八日 大霜、快晴、

朝六ツ起、朝川北孫左衛門殿入来、四ツ八ツ出勤、
帰宅、直ニ野屋敷へ参候テ藏ヨリ素袍・烏帽子其外
年首入来之品々出シ、且門松・床松・雪松用ヤフコ
フシ・竹・ウラシロナト取合、(茶釜カ)茶兼ナト持帰候、木
尾彦左衛門殿入来、おとくととのニモ一刻、木尾氏ニ
ハ四ツ半被帰、無程臥候事、

二十九日 霜降、快晴、

朝六ツ過起、四ツ前平佐へ一刻参、四ツ八ツ出勤、
直ニ帰宅、夜四ツ半時分臥候事、暮ヨリ指宿猪之介

殿入来、四ツ前被帰候事、

一今暁ノ夢ニ、庭ナルニホヒ桜ニ花咲ケルヲミルニ、
夫ニヤトリ木アリテ、ソレニモ珍ラカナル花咲出タ
ルガニホリカフハシクテ夢中ニ歌ヲヨメル、

やとり木の花さへいと、にほふかな

匂ひ桜にそたちよければ

晦日 快晴、

朝六ツ起、野屋敷へ用事有之、参候テ五ツ時帰宅、
四ツ八ツ出勤、退出掛今和泉屋しき・御墓・花薨軒・
伊藤六郎右衛門殿・戸柱町田家・静洞様・周防様へ
一刻ツ、罷出、内記録へモ同刻七ツ時帰宅、内外取
集方或ハ諸下地イタシ暮過相濟、五ツ時分ヨリ家内
中打寄り、酒共給候テ四ツ過臥候事、

御通達之写

衣服之制度御変革相成居候処、以来以前之通脱斗目・
長袴等致着用候様従公義被仰渡、其段ハ別段申渡通
二候得共、御当地服沙汰之儀者昨年被究置候通相替

儀無之候条、其通相心得候様向々へ可申渡候、
十二月

（島津久敏）
大藏

